

小学校時代は朝食前と学校から帰った後は農家の仕事の手伝いをしました。日曜日は長岡市の朝市で粽用の笹の葉を母と共に売りぜんまいや野菜もありましたが2-3時間で売り切り往復40キロの道をリヤカーを引いて仕事をしました。山あり谷ありで怖い思いも多く、右側の山に見える早朝の薄暗い墓場はいつも背中がぞっとする思いでした。

新潟県長岡市の過疎地に生まれた私は小学校のころから将来の夢を持っていました。それは総理大臣になるということでした。しかしその意味は政治の世界のことではなく、将来どのような職業に就こうとも必ず日本か世界でトップになりたいという意味でした。そしてもし他人にいじめられたときには心の中で今に見ていて下さい。その人より必ず上になってみせるという気持ちを持ちました。そういう意味でいじめられることは私にとってやる気が出てくる良い機会でもありました。

中学を卒業後すぐに学校の紹介で東京都墨田区にあった山谷硝子工業に就職し、夜は近くの墨田川高等学校に通いました。私が東京に出てきたのには二つの理由があります。一つは働いで収入の50%を苦しい家庭事情の中でも、これまで私を育ててくれた両親に仕送りすること。

二つ目は経済的な理由で昼間の高校には行けませんでしたが1日の仕事を終えた後の夜の墨田川高校で4年間一生懸命に勉強することでした。しかし次第に残業が多くなって授業に遅刻するようになり、高校の石川先生と相談し1年と三か月で当時小さな田中文具店に就職しました。そこにはおじいさんとおばあさんそして女性一人が働いていました。文具店と言っても殆ど売れそうもない小さな店でした。私が夜間高校2年の時、経営者である田中米二さんが私に次のように言いました。

昔自分がやっていた家庭紙の卸を始めたいので小売店の新規開拓をしなさいとのこと。私は何も否定する術(すべ)を持たず、ただはいと言わざるを得ませんでした。そこでその日から毎日新規の小売店を探すべく奔走しましたが若造の私には全く何をやってもうまくいきませんでした。しかしたくさん小売店を回った中でも一件のお店さんだけは1月位毎日通えば何とかなるような感じを受けました。

そこで1店だけに絞って取引をお願いすることにしました。そのお店のお名前は墨田区押上にあった伊勢元商店様でした。毎朝シャッターが開くのを待つのが日課でした。そしてそのお店のご主人様に毎日お願いのために参上することになりました。しかしなかなか話を聞いてくれようとしません。こうなったらこれは執念というべきか、相手が商品の一つでも買ってくれるまで決して諦めないで挑戦することにしました。そして、ついに夢のようなうれしい回答がいただけました。

金額は低くたった一つの商品だけの注文でしたが当時の私にとっては生まれて初めて手にしたご注文の第一号だった感動です。これをきっかけにがむしやらに多くの新規の店を訪問し受注の獲得に成功していきました。

その頃特に重視したことは価格は他の業者と比較して少しでも安くすること、一回の注文数はお客様の立場に立って、ストック場所の有効活用をするために必要最小限でよいこと、配達はず必ず翌日にすること、お店の売り上げに貢献する新しい商品を常に紹介すること、売上げアップのための陳列方法の指導、売れない商品の早期返品や交換、競合店の価格情報提供、平均利益率と商品回転率の指導、売り場ゴールデンゾーンの有効活用、チラシづくりの支援、顧客満足の促進などでした。

話は前後しますが私が待ち望んでいた前述のような小売業販売士資格制度が開始されました。小売業者の為の資格者制度とも言えます。最初は3級からでしたので、私を先頭として当社の営業マンは全て資格を取得すよう義務付けました。その後私は2級、1級もその資格を取得することができました。

お客様への対応として特に重視した点はお客様からのクレームです。これを最大限活用し、なぜクレームが発生するのか、どうしたら改善できるか、顧客の立場に立った商売をしているかなど、いつもお客様の立場になった商いをするよう努力しました。いやなことから逃れることなく積極的に立ち向かうことで満足を販売する姿勢に変わりました。別の言葉でいうならば仕事は満足販売業ということもできます。

私はそれまで他の会社で働いたこともなく全くの素人でしたが、それがまたプラスに働いたとも言えます。お客様からの評判は予想よりもはるかに高く、お客様から他のお客様へのご紹介が多くなってきました。それによって八潮本店だけに留まらず柏支店を始め首都圏にどんどん出店し、広い地域に進出できる

ようになりました。

当時事業はとても順調に進んでいましたが長い年月の間にはいくつかの事件が起きました。ある時、早朝の4時ころ警察から電話が入りました。内容は「あなたの会社の社員二人が交通事故で大型トラックに衝突しました。そしてトラックの下敷きになり二人とも現在病院に入っていますが手当てのしようがない位ひどい状況です」とのことで電話が切れました。

しばらくして再び警察から電話が入り大変残念ですがお二人とも今亡くなりましたとの電話がありました。一人は私の弟でしたが当時二人とも当社の支店長をしていました。年齢は二人とも39歳で3人ずつの子供がいました。そして青山葬儀場にて合同葬儀を行いました。

その後二つ目の出来事ですが、ある時私はアメリカの市場視察に出かけていましたが、サンフランシスコにいる時、早朝に日本にいる娘から電話が入りました。「お父さん今、八潮の本社と倉庫が火災で燃えています」とのこと私はとても信じることができず一回電話を切ってから再度日本に確認のために役員にすぐ電話しましたがやはり火災であることが判明しました。私は驚きと共に役員に対して即座に次の指示をしました。

1. 死者が出ないことを最優先する
2. 受注伝票も燃えているようなので明日朝からすべてのお客様に電話で事情を話し受注内容を確認すること
3. この火災は紙が多いので2-3日は燃え続ける可能性があるが、お客様の注文品はいつものように必ず欠品なく、しかもいつものように遅れることなく納入すること。
4. 商品は燃えて在庫がないので当社の他の支店から協力してもらうこと。
5. 5つ目が近くの公民館を借り切り、臨時電話を最低20から30本位入れる事でした。この実行によって当社の信用力がさらに高くなり営業に於いても大いにプラスになりました。この災難によって、不可能なことはない、そしてやれば何でもできる、人間の潜在能力は平均10%程度しか使われていないが困ったときにはさらに潜在能力の顕在化が可能になる事が裏付けられました。

1975年36歳の時ビジネスの繁栄を目指して東京から八潮市に本社を移転しました。その時に地元の有志であった方から八潮にロータリー・クラブを創設するので入会するよう勧められました。私はロータリーの知識は全く持っていませんでしたが、はいと即了承しました。その時から36年目に国際ロータリーの

会長になるとは夢にも思っていませんでした。

家庭紙の卸売業としては確かに日本でトップになりましたが、次の目標は化粧品雑貨総合卸業として日本一になる夢を持っていました。札幌にあるダイカさんとの関係はその第一ステップのチャンスがやってきたと感じました。ダイカに合併を申し込んでから1年を経た後に大社長から合併の重要な要素である合併比率のことで連絡がありました。

当時私が社長であった株式会社タナカは業績はとても順調に推移していましたが、何の条件もなしで大社長の要請に100%即座に了解の返事をしました。私は、会社は自分のものではなく社会の為のものであると考えていましたので、何の抵抗もありませんでした。

ロータリアンになって10年以上経った後から国内でもいろいろな役職が与えられ、シカゴ本部からもほぼ毎年国際的な委員会の委員となりました。どのような役職でもその都度全力を尽くして、まったく悔いないようにその役職を務めあげることができました。その時から自分の職業よりもロータリーに時間を取るようになったのです。そのおかげで会社内の部下の育成が早めに行うことができました。

国際ロータリー会長年度を含めて延べ2年半はシカゴの本部近くに住みその期間中ロータリーのために世界中を訪問することが仕事でした。家内の京子と共に訪問国は70か国以上になりましたし、世界各国のトップや責任者とお会いすることができました。

私の生きる目的である他者のためにそして地域社会の改善や発展のために少しでも役に立てることを目標に頑張っていきたいと思います。またアフリカを始め世界では多くの人たちがまだまだ教育を受けることもできず、病院にも行けず、栄養ある食事のままならず、夢も希望も持てない方々がたくさんおります。このような方々にも少しでもお役に立てるよう努力してまいりました。

ロータリー・クラブのある地域社会は、クラブのない地域よりも必ず良い場所になると私は信じています。ロータリーがある地域社会の人々の人生は、もっと豊かなものになると思います。ロータリーが大きくなれば、それだけ強くなりますが、ただし、会員数を増やすことだけを目的に新会員を入れても、ロータリーは強くなりません。ただクラブに入会するのではなく、真のロータリア

ンとなれる人を迎え入れクラブで指導してこそ、ロータリーは強くなれると思います。

私が八潮ロータリー・クラブに入会した日は、新しい人生を歩み始める第一歩となりました。人々とのつながり、奉仕を通じた満足感や達成感、そして平和を、それまでよりも深く感じるようになりました。私は、この気持ちを多くの人に伝えていきたいと考えておりますが、その方法の一つが、ロータリーへの入会をお誘いすることだと考えています。

入会見込者に伝えなければならないのは、ロータリーが素晴らしい団体であるということ、そしてロータリーへの入会によって、彼らの人生がより幸せになるということです。ここにいる私たち全員が、会員であることの素晴らしさを知っており、ロータリーを愛しています。私たちがロータリーで見つけた幸せを、多くの人々に知っていただきたいと思います。

さて青少年奉仕は、ロータリーで最も新しい五つ目の奉仕部門です。長期的な影響を生み、今の人々だけでなく、後世のために何かを残そうというロータリーの思いが、青少年奉仕に反映されています。青少年奉仕は、青少年とその家族、そして未来の世代のための、すべての奉仕を含んでいます。識字率向上、職業訓練、母親のための保健プログラム、子どもたちの栄養強化といった活動から、ローターアクト、インターアクト、ロータリー青少年交換などのプログラムに至るまで、ロータリーでは、若者たちがベストの状態での人生の第一歩を踏み出せるよう支援しています。

一例として、現在、ナイジェリアでは、18人に1人の女性が、出産によって命を落としています。ロータリーは、母親の保健のための取り組みを通じて、このような悲惨な状況をなくし、母親のいない子が一人でも少なくなるよう、活動しています。さらにロータリーは、20億人の子どもをポリオから守ってきました。かつて世界を苦しめていたこの悲惨な病気は、撲滅の寸前にあります。ロータリアンの長年の活動によって、世界からポリオがなくなる日は遠くないはずです。

また、それぞれの地元地域で、子どもたちに読み書きを教え、貧しい家庭の子どもに本を贈るといった活動もしています。読書を通じて、子どもたちは夢を膨らませます。本は、新しい世界への扉を開くものです。

青少年交換では、世界がいかに大きいかを、直に見てもらうことができます。異文化を体験し、視野を広げ、新しい人々との出会いを通じて、平和を推進し、思いやりの心を育てることができます。また、ローターアクト・クラブとインターアクト・クラブを通じて、奉仕の大切さを伝えることができます。

ロータリアンは、子どもや青少年と接しながら、一人ひとりの可能性を広げ、彼らの人生を変えています。彼らがどのような大人になるのか、ロータリーからのプレゼントが彼らの未来にどう影響するのかは、誰にも分かりません。しかし、今、私たちがしていることが、将来、彼らの人生を通じて、社会に良い影響を与えていく事は確かです。

青少年奉仕は、ロータリーにおいて極めて重要な部分です。未来の世代がロータリーを頼りにしているように、ロータリーも彼らに頼っています。ロータリーは発展し続け、新しいロータリアンを生み出していく必要があります。将来、ロータリーの活動を継承していくのは、ほかでもなく、次世代のロータリアンです。私たちは、熱意や知識や経験を若い世代に引き継ぎますが、同時に、彼らから多くを学ぶことができます。

ロータリーが大切に、必要としていることの多くは、情熱とか、積極性など、若さを連想させる要素です。若者は、恐れ知らずです。できない理由の言い訳を探す代わりに、やり遂げる方法を見つけようとしています。

ロータリーでは目標を高く掲げていますので、このような姿勢に共感できる方も多いはず。例えば、私たちが掲げた目標は、数人の子どもにポリオの予防接種をすることではなく、ポリオを世界から撲滅することでした。目標を高く掲げてはじめて、一生懸命にがんばり、限界を押し広げようという意欲が沸くものです。

若者たちが持つもう一つの特徴は、柔軟性です。ロータリーが発展するには、変化する世界とともに、私たちも変化する柔軟性を備えなければなりません。新しいアイデアや考え方に心を開くことも必要です。

毎年、青少年交換プログラムで、何千という高校生を海外に派遣しています。また、ロータリーのコミュニティーには、何十万人という学友がいます。これらの学友たちに入会してもらうには、どうすればよいでしょうか。

例えば、学友の行事を開催したり、ソーシャルメディアの力を活用できるように。また、新しいインターアクト・クラブやローターアクト・クラブを設立したり、インターアクターとローターアクターのつながりを強めることもできるでしょう。次世代に「超我の奉仕」を引き継ぐことは、時間をかけて行う価値のあることです。

会員基盤を成長させることは、すべてのロータリアンが果たすべき役目です。それは、単に会員の数を増やすということだけでなく、もっと多くの人とロータリーのプレゼントを共有することを意味しています。

私にとって、「超我の奉仕」とは、人生そのもののあり方です。人は誰でも一人で生きて行くことはできません。誰もが、地域社会、家庭、学校、職場などで、他の人々と人生を分かち合っています。

誰かと人生を分かち合いたいという気持ちは、人間として自然なことです。自分が幸せな時や悲しい時、成功した時や困難に直面した時、誰かにそばにいてほしいと感じるものです。それと同じように、誰かが私たちのことを必要としています。

地元地域社会での奉仕は、人を助けるだけでなく、自分自身にとっても得るものが多くあるはず。奉仕活動を通じて、近所の人たちをもっとよく知ることができます。また、その人たちに、地域社会の大切さを伝えることができます。

これまで私は、世界各地の訪問を通して深く印象に残った数々のプロジェクトがあります。ケニアでは、親がエイズで亡くなったために、孤児となった子供たちのための施設を見学しました。このような子どもたちはあまりにも多く、施設に入ることでできない子供たちが沢山います。

こうした状況を認識した地元のロータリアンは、援助の手を差し伸べ、他の国のロータリアンと協力して、施設と学校を設けました。このプロジェクトによって、子供たちは路上の生活から救われた上、ベット と食事に加えて、介護や教育を受け、生活技能を習得し、家庭の雰囲気と希望のある未来が与えられたのです。

このようなプロジェクトを一つ地元社会が単独で支援することは困難です。し

かしロータリーを通じて、いくつかの地域社会が協力すれば、子供たちを助けることができます。

イスラエルでは、世界で最貧国の子供たちに現代的な心臓医療を提供しているロータリーのプロジェクトを知りました。このプロジェクトでは、小児心臓外科医が、アフリカ、ヨーロッパ、中東に赴き現地の医師に手術や集中治療の研修を行っています。さらにこれまで18年間に、1万7千人を超える子供たちがテルアビブにやってき心臓救命手術を受けました。

他の多くのロータリープロジェクト同様、このプロジェクトは、当初の計画よりも多くのことを成し遂げてきました。もちろん当初も心臓疾患を抱える子供たちに現代医療を提供し、長く健康的な人生を与えることを目標としていましたが、目標への過程で、平和への構築にも役だってきました。

手術を受けにやってくる子供たちの半数は、パレスチナ人民居住区や、ヨルダン、イラクから来るアラブ人の子供たちです。彼らはイスラエルを嫌い、恐れるよう教えて育てられましたが、このプロジェクトを通じて家族も含め、それまで見る事のなかった現実を、自分の目で見える機会に恵まれました。

政治のないところで、両サイドの人たちが結び付いたのです。そこにある思いやりの心、コミュニケーション、相互理解、それ以外の方法では実現しなかったでしょう。これこそ、私たち異なる背景を持っている人たちにとっては、平和を構築するための最善の方法ではないでしょうか。このような行動を通じて、奉仕の心を多くの人々に持って頂き、幸せと希望に満ちた世界を作り、究極的には、世界平和という目標を実現できると私は思います。

ロータリーは長年、私の人生の中心となってまいりました。ロータリーのおかげで、世界を違った視点から見るできるようになりました。ロータリーは、地域社会や国際社会に影響を与えられるだけでなく、私がそうであったように、一人の人間の人生に大きな影響を与えます。ロータリーの真の素晴らしさは、そこにあるのではないのでしょうか。

ロータリーへの入会理由はそれぞれ異なるかもしれませんが、誰かの人生に喜びをもたらすことによって、自分自身が幸せになれるということは、多くのロータリアンにとって、ロータリアンであり続ける理由となっているのではないのでしょうか。これこそが、ロータリーの精神であり、平和な世界を築くために

必要な精神であると信じています。

私はRI 会長になって以来、新しい体験をたくさんさせていただきました。初めてアフリカそして南米の国々を訪れたのをはじめ、インド、モンゴル、フィリピン、ネパール、ヨーロッパ、米国の各都市など、2年半にわたり世界各地を訪れることができ、訪れる先々で、貴重な体験をさせていただきました。

アムステルダムでは、証券取引所の開始の鐘を鳴らす榮譽に授（さず）かりました。そしてバチカン宮殿では家内の京子と共にローマ法王との面会が許されました。

また、壊滅的な打撃をもたらしたハリケーン「サンディ」の直後にニューヨークの国連本部を訪れ、モンゴルでは遊牧民のテントの中に入りました。どこへ参りましても、現地の方々から温かい歓迎を受け、自宅でもてなしをして頂いたり、友人のように接していただいたことに、感動いたしました。また、このロータリーのピンを身に付けられることの素晴らしさを、改めて実感いたしました。どこへ行っても、誰に会っても、ロータリーのピンを付けている人を見れば、その人がどういう人なのかが分かります。

どこに住んでいようと、何語を話そうと、どんな服を着ていようと、ロータリーのピンを付けている人なら、信頼することができます。同じ価値観を持ち、腹を割って話し合い、友情を分かち合うことができます。私は新潟県で生まれ、現在は八潮市に住んでいますが、ロータリアンとしてどこを訪れても、ふるさとを訪れているような気持ちになることができます。

最初の少し触れましたが、私が小学生のころ、週に一度日曜日に母と私は、市場まで往復40キロの道を、リヤカーを引いて野菜を売りに行きました。その頃は日本人以外の方々とは、一度もお会いしたことがなく、私が生まれた村が私の全世界でした。ですから、私はいつも、旅することを夢に見ていました。遠くの町や国を夢見ながら、どんな所なのだろうと想像していました。それ以来、幸いにも、頻繁に旅をする機会があり、自分で思いもよらないほど、世界のあちこちを訪れることができました。

しかし、ロータリーでの経験ほど私の視野を広げてくれたものはありません。ロータリアンになるまで、私の目に入っていたものと言えば、仕事、家族、顧客、競争相手など、身近なものばかりでした。旅に出ても、お決まりのものし

か見ていませんでした。その背景にあるもの、自分と関わりがないと思うものには、気にも留めていませんでした。

関考友さんという地元の有志から誘われてこの地域のためになる組織や団体ならば進んで参加すべきという考えで八潮ロータリー・クラブに1975年に創立会員として入会しました。入会してから1~2年間はあまりなじめずに只出席だけをしていましたが、その後ある方が例会に来て、職業奉仕についてお話をして下さいましたのです。

私は、その日から自分の生きる目的や人生の考え方が少しずつ変わってきました。収入や、売り上げを増やすことや、自分の会社を他の会社よりも良くし、大きくすることだけでなく、人として、職業人として、もっと良い、もっと高い目的を持って人生を送りたいと思うようになったのです。

そしてそのために、他の人たちの役に立つこと、そして地域社会の発展に少しでも寄与することが、私にとって人生で最も大切なことだと思えるようになりました。さらに私は、どんな些細なことでも、地域や世界社会で困っている人々を助けることがいずれは平和につながることに気づきました。

ロータリーは、保健、衛生、食糧、教育などの人々の基本的なニーズに、最も必要とされている地域で応えることができます。そして、友情、つながり、思いやりといった、私たちの心のニーズにも応えることができます。さらに、国や民俗間の友情と寛容を推進することで、ロータリーは、最も伝統的な意味での「平和」を、つまり、互いを理解し合う後押しをしてくれます。

ロータリーの奉仕活動を通じて、私たちは、大きな問題のように見えることでも、力を合わせれば、すぐに解決できることを学んでいます。人を思いやることを学び、自分と違った境遇の人々と知り合うことで、人は皆同じであると理解できます。

ロータリーの奉仕活動を通じて、私たちは、何かを達成しようとするなら、対立より協力を選ぶのが得策であることを知ります。他の人の長所と短所、両方を尊重することを理解できます。そして、どのような人からも必ず得るものがあり、教えられるものがあることを学びます。私は、「超我の奉仕」は単なる標語ではないと考えております。それは、誰の人生をも、さらに豊かで、有意義なものにする、生き方を示していると思います。ロータリアンは、自分より

も、ほかの人のニーズを重視します。

自分のためだけではなく、社会全体のためを考えます。「超我の奉仕」という言葉は、人生で本当に大切なこと、エネルギーを注ぐべきことは何なのかを、私たちに教えてくれる言葉です。そうすることで、より平和な世界の基盤を築くことができると考えます。それは、「平和」をどのように定義するにしても、私たちは奉仕活動を通じて、平和をもっと現実近づけることができるからです。

また、「超我の奉仕」は、人はみな自分だけでは生きていくことができないということを教えてくれます。人との関わりのない人生は、空しく、つまらないものですが、家族、地域社会、そして人類全体における自分の役割を常に意識して、つまり、人のために生きることで、この世界における自分の役割がはっきりと見えてきます。

さて「財団は、ロータリーという組織を動かすエンジンである」と、よく表現されます。これは、ロータリアンが活動に励み、財団が活動のための燃料を提供するという、国際ロータリーと、ロータリー財団の関係を、的確に表しています。財団のおかげで、ロータリアンはさらに多くの活動を行うことができます。しかし、財団がリソースを維持し、発展できるのは、ロータリアンからの弛みない支援があるからです。

ロータリー財団への寄付は、賢明な投資です。なぜなら、寄付したお金が有意義な活動に生かされるからです。寄付が適切に活用されると信じて、お金を託すことができます。

財団の力を借りて、ロータリーは、多大な成果をもたらす国際的なネットワークへと発展してまいりました。強い財団があるからこそ、ポリオ・プラスという壮大なプロジェクトが開始できました。皆さまご存知のように、世界各地のロータリアンの懸命な活動とご支援により、ポリオは「あと数年」で撲滅できるところまで来ています。1985 年以来ロータリーはポリオ撲滅の最先端に立ち世界のロータリアンの力強いご支援のもとに戦って参りました。そして間もなく今世紀における快挙を成し遂げようとしていると同時に、私たちはロータリアンであることを誇りに思っています。

ロータリーは、財団を通じて、ロータリー平和センターを設立しました。平和

センターは、平和を推進し、地域社会や国際舞台で活躍できるリーダーを育成することを目的としております。平和フェローは、将来、国際協力や、平和、紛争解決の分野で活躍できるリーダーとなることが求められています。このプログラムは、私にとって、とても重要なものです。このプログラムの重要性を信じ、力強くサポートしてくださっている方々に、心からお礼申し上げます。

皆さまがロータリー財団、そして世界のために注いでおられる熱意とご尽力に、心より感謝いたします。皆さまは、財団のモットーが表すとおり、「世界でよいこと」を行い、ロータリーという組織に必要な燃料を与えて下さっています。皆さまのお陰で、ポリオのない世界、平和な世界に、また一歩近づくことができるでしょう。

ロータリーのビジネスは、利益の追求ではなく、平和の追求です。ですから私たちにとって、報酬はお金を手に入れることではなく、自分の努力によってより良い、より平和な世界が実現するのを見届けることにあります。ご静聴有難うございました。